実践講座Cコース　第1回講座　2016.5.22

展覧会をつくる

春原　史寛

デジタル大辞泉の解説

てん-じ【展示】

［名］(スル)美術品・商品などを並べて一般に公開すること。「作品を展示する」「展示即売会」

大辞林 第三版の解説

てんじ【展示】

（名）スル
作品などを並べて，多くの人に見せること。「生徒の絵を－する」

日本大百科全書(ニッポニカ)の解説

展覧会
てんらんかい
exhibition 英語 フランス語

芸術作品や産業製品を収集して、限られた期間、特定の会場において展示し、広く一般の観覧に供する催し。恒久的施設に収集品を常時陳列する美術館や博物館とは異なり、展覧会は比較的短期の場合が多く、一定の目的達成を図る主催者と、これに協力する出品者の協力によって行われる。広義には、物品の観覧や売買を行う見本市や新製品発表のビジネスショー、各種博覧会などもこれに含まれるが、単に展覧会といえば、美術展覧会をさすことが多い。［中山公男］

展示・展覧会とは？

- 「もの」をあつめて
- ある会場において
- ある期間を定めて
- 「もの」を並べて
- 一般の多くの人々に公開する会

展示・展覧会とは？

- 書籍やウェブなどの情報とは異なる、（博物館や美術館の）展示の独自性。
- 現在ここにある物理的な「もの」を介して、過去（歴史・記憶）を現在進行形（いまここにある出来事として）で提示できる。

展示・展覧会とは？

- 「展示はコミュニケーションのメディアである」という理念が1970年の大阪万博で注目される。

1. 「何を伝えたいのか？」（メッセージ：「もの」と「こと」の結びつき）
2. 「どこで行うのか？」（場所と「もの」の結びつき）
3. 「誰に見せたいのか？」（対象：「こと」と「ひと」の結びつき）

をプロデュースする、キュレーション＊する。

＊ある視点を設定して情報を収集しまとめること。収集した情報を分類し、つないで新しい価値を持たせて共有すること。

展覧会をつくる【全体図】

- 調査・取材

企画
- 立案・予算の調達
- 出品依頼
- 展示レイアウト作成

資料
- 修復・マウント
- 資料（作品）撮影
- 資料借用

展示
- 会場構成
- ディスプレイ
- 資料展示

展覧会

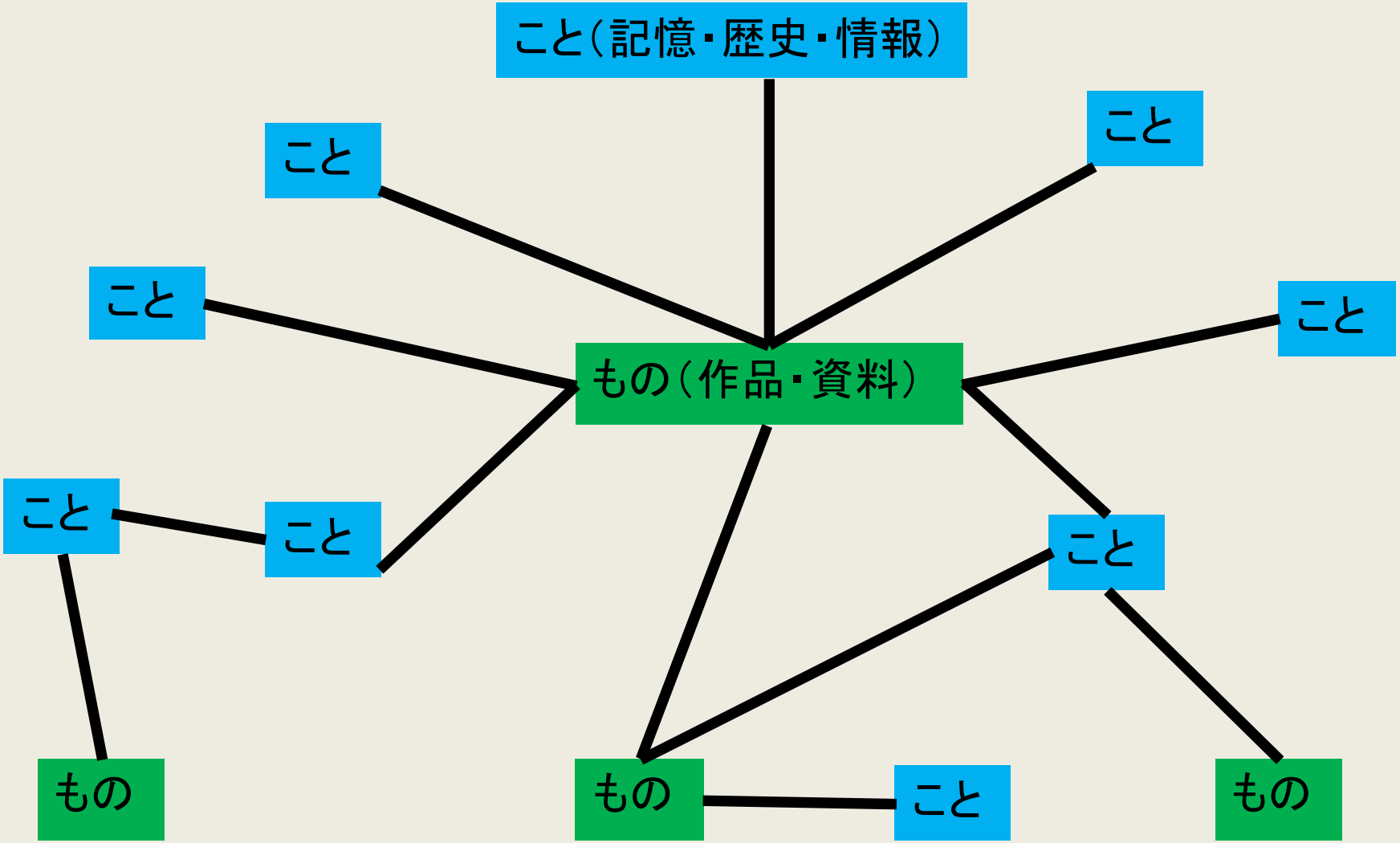
教育普及
- 図録作成
- 広報（印刷物・取材対応）
- 地域連携
- 教育普及活動
- 関連商品販売

- 資料撤収
- 会場撤収

- 記録作成
- 記録評価

- 資料返却

「こと」と「もの」を結び付ける



➡作品（資料）台帳・調書を作る

「こと」と「もの」を結び付ける

■「こと」＝「もの」にまつわるさまざまな情報

- モノ自体の情報
- そのモノをめぐる同時代のコミュニケーション
  - ➢ 人とのかかわり
  - ➢ 場所（地域）とのかかわり
  - ➢ ほかのものとのかかわり

➡「もの」とそれにまつわる「こと」や、それらの関係性から新しい視点や価値を提案する。

「こと」と「もの」を結び付ける

- 「法隆寺も平等院も焼けてしまって一向に困らぬ」

（坂口安吾「日本文化私観」1942年）

➡空虚なものを否定して「真実の生活」を創造と等しいと位置付けた。

- 「法隆寺は焼けてけっこう」「自分が法隆寺になればよいのです」

（岡本太郎『日本の伝統』1956年）

➡芸術以外の領域・分野を含んだ「伝統」を徹底的に吟味して新たな価値（伝統）を創造すべきという伝統観

歌川 広重
**富士三十六景
甲斐御坂峠**

紙に木版

20 河口湖美術館

棟方 志功
雲富士山図

1974年　油彩・キャンヴァス

21 フジヤマミュージアム

降矢 組人
梅林郷陽春賦

2005年　油彩・キャンヴァス

21 フジヤマミュージアム

山口 華楊
如月富士

1965年　紙本着色

21 フジヤマミュージアム

水野 竜生
Fuji

2006年　アクリル・キャンヴァス

21 フジヤマミュージアム

キャプションの例（山梨県立美術館「やまなしの美術館大全展」2009年）

ユーサフ・カーシュ

1908年トルコのマルディンに生まれる。14歳の時、アルメニア人の虐殺を避けてシリアに移る。その2年後、写真家の叔父を頼ってカナダのケベック州シェルブルックに移住。叔父のスタジオを手伝うようになる。彼の才能を見込んだ叔父は、ボストンの写真家の元に弟子入りさせた。1931年、オタワにスタジオを構え、当時のカナダ首相を始め、ヘレン・ケラーやアインシュタインなど多くの著名人のポートレイト写真を手がけた。ウィンストン・チャーチルの写真は、1941年『ライフ』誌の表紙を飾った。

8 清里フォトアートミュージアム

植田 正治(うえだ しょうじ)

1913年鳥取県西伯郡境町(現境港市)に生まれる。東京のオリエンタル写真学校へ3ヶ月間通った後、郷里に帰り、19歳で営業写真館を開業する。生涯境港市を離れず、山陰の風景を背景として作品を撮り続けた。特に鳥取砂丘を舞台にした「砂丘シリーズ」はよく知られている。被写体をオブジェのように配置した植田正治の演出写真は、フランスを始め、海外で"Ueda-cho(植田調)"という言葉で紹介されるほど、その斬新な構図と際だった個性が高く評価された。

8 清里フォトアートミュージアム

アーヴィング・ペン

1917年ニュージャージー州ペインフィールドに生まれる。アレクセイ・ブロドヴィッチのもとで、グラフィック・デザインを学ぶ。1950年代から長く『ヴォーグ』誌などの広告写真家として活躍。パリとニューヨークにスタジオを持ち、一切の撮影をスタジオ内で行い、シンプルな背景でモデルとなる人々の個性を強烈に浮かび上がらせていくスタイルで知られる。その洗練された独特な世界は、静物写真の分野でも高く評価されている。ニューヨーク在住。

8 清里フォトアートミュージアム

ジェリー・N. ユルズマン

1934年ミシガン州デトロイトに生まれる。ロチェスター工科大学でマイナー・ホワイトに写真を学ぶ。1967年ニューヨーク近代美術館にて個展が開催される。ユルズマンの作品作りは、撮影した時点でイメージが作られるのではなく、暗室内での極めてアナログな、高度な技術に支えられている。5-6台の引き伸ばし機を使用して、数枚のネガの多重露光によりイメージを再構成し、リアルな映像の組み合わせから、超現実的な世界を創りあげることに成功している。フロリダ州在住。

8 清里フォトアートミュージアム

ロバート・キャパ

1913年ハンガリー・ブタペストに生まれる。幼い頃から社会と政治の改革に関心を持つ。左翼学生運動に加担したとして逮捕され、17歳でハンガリーを国外追放となって以来、定住せず、波乱に富んだ人生を送る。第二次大戦など苛烈をきわめた戦場を生き抜いたが、1952年に来日後、日本から向かった仏領インドシナで地雷を踏み、40歳の若さで亡くなった。人間性の抑圧を憎み、困難な状況にある人間への並外れた同情心が見て取れる写真が、今も多くの人を魅了している。

8 清里フォトアートミュージアム

W. ユージン・スミス

1918年カンザス州ウィチタに生まれる。『ライフ』誌の記者として、太平洋戦線を取材中、日本軍の攻撃により被弾する。第二次大戦後、『ライフ』誌などに写真史に残る数々のフォト・エッセイを発表。70年代には水俣病を取材するなど、多くの重要な作品を残した。生涯を通じて、人類の悲惨が、人種的偏見、貧困、憎悪、偏狭によるものであるかということを、厳格な写真表現を追い求めることによって強く訴えた。光と闇を象徴する美しいモノクロームの印画は、静謐さと永遠性を湛えている。

8 清里フォトアートミュージアム

ロベール・ドアノー

1912年パリ郊外のシャンティイに生まれる。石版画の技術とグラフィック・デザインを学ぶが、伝統やスタイルに固定されない写真の世界に魅せられ、独学で写真を学ぶ。第二次大戦後、『ライフ』などのグラフ雑誌が全盛期となるが、ドアノーは、社会の被圧者や貧困など、雑誌の需要に応じた写真を撮ることを止めていく。普通の人びとの日常の出来事の中に織りなされる憧憬、幸福、悲哀などさまざまな感情を、共感に満ちた眼差しで捉え、ユーモアで彩る作品を多く生みだした。

8 清里フォトアートミュージアム

解説パネルの例(山梨県立美術館「やまなしの美術館大全展」2009年)